

ユビキタス時代のビル建築設備

Building Facilities in the Ubiquitous Era

太古の昔、人間はみずからの身を守るために道具を発明し、火を手に入れました。その後も、みずからの生活の質を向上すべく、家を中心に整備してきました。そして、人間の生活は様々な発展を遂げ、オフィスビルや工場などに集まり生産性を上げるようになりました。現代においてビルは、道路、空港、上下水道などとともに、重要な社会インフラの一つと考えられています。更に、インターネットなどが発達した結果、ビルとビルとは365日24時間、世界的な規模でネットワーク接続され、時空を超えた社会インフラになりました。

今後、本格的なユビキタス時代に向けて、人間や物の状況を自動的に認識して通信を行うセンサネットワークの実現が検討されており、近い将来このような技術がビルにも適用され、社会インフラをより便利に、より効率的に運用することが期待されています。

人間の生活が便利で安全になる一方で、わたくしたちともっとも付き合いの長い地球の環境破壊が深刻な問題となっています。地球温暖化ガスの代表的な物質である二酸化炭素(CO₂)に注目してみると、寿命を40～50年とした際のビル建築物のLCCO₂(ライフサイクルCO₂:建設から破棄までに直接的、間接的に排出されるCO₂の全量)は、全産業のその1/3を占めており、その削減は重要課題となっています。

東芝グループは、ビル建築物で使用される電源設備、中央監視設備、セキュリティ設備、照明設備、空調設備、エレベーター設備など、各種のビル建築設備の製造を行っていますが、環境に配慮した省エネルギー製品としてトップランナー対応のエアコン、蛍光灯器具、変圧器などを開発・製造し、また、快適さと省エネルギーを両立させる空調制御技術などの製品化にも取り組んでいます。これからも最新のエレクトロニクス技術やネットワーク技術を活用し、個々の製品の性能を向上させるだけでなく、真に便利で、地球環境との調和を図ったビル建築設備にかかわる製品やサービスを継続的に提供していきます。



加藤 高敏
KATO Takatoshi